

中世日本語辞書『撮壤集』のデータベース

萩原義雄（駒澤大学名誉教授）、高田智和（国立国語研究所）

一、『撮壤集』研究の回顧と展望

亀田次郎は、『国語学書目解題』の「撮壤集 三巻」項目に、

享徳の頃飯尾永祥の作れるもので、分類體の辭書である。本質的價値は餘り高いと云へぬが、製作年代の比較的古い點で注意される。室町時代國語研究の資料として又その語彙は一般國史、風俗史、宗教史方面に貴重な資料を提供するものと思はれる。

とし、時代を「享徳の頃【注1】」とし、編者を「飯尾永祥【注2】」と記載して本書『撮壤集』が「分類體の辭書」と明記する。続けて、「本質的價値は餘り高いと云へぬが、製作年代の比較的古い點で注意される」として亀田氏が今回公開する『撮壤集』の最善本の資料を目の辺りにしていたかは聊か疑問とするしか他ならない。その事由としては、江戸時代に転写された数多くの『撮壤集』が現存し、各々個別な転写本に順って本書を読み解いていることに尽きる。その意味からも、『撮壤集』の最善本を紹介することが急務であり、今般の実行作業としての手続きとなっている。

【注1】今回紹介する『撮壤集』室町中期写本（上中下三巻合一冊）の序文末尾には、「享キヤウ

徳甲戌十有一日己未書ス于桃花坊蘭齋ラウサイ」^三と云う識語を有し、本書が西暦一四五四年一

月に成ったことが明らかとなる。

また、転写諸本の一つ、群書類従本〔静嘉堂文庫蔵（↑秋葉氏蔵書印↑萩原義之旧蔵印）写本〕奥書きには、

撮壤集三卷は慶應元年如月、塙氏の蔵本をかり

得て写したるに誤字落字の不利、心あしく覺たるに(を)

はからす一本を得てあはせ見るに、塙氏の本よりは

こよなうまさり、これは朱砂をもつてとひつたゝし、これの

本もあからさまにあやまれると見ゆれと、わたくしになほす

へきにあらねは、そのまゝにうつしぬ、後日よき本を

得て、なほ校合すへきわさになん、慶應三（1867）年六月十九日 秋葉義之「花押」

とあって、埴保己一の師萩原義之（宗固（ソウコ）むねかた）が蔵書であった写本も本書系統の証しとなっている。茲にも「享徳甲戌十有一月巳未書^{キヤウ}」とある。亀田が精確な年数で記載しなかった意図は外にもあつたやもしれないという見解に落ち着くべきか。とはいえ、諸書転写本のなかでも此の本文語彙を比較してみて、より精度の高い転写資料となっていることから、今後二次的に校合研究するうえで、静嘉堂文庫蔵本は『撮壤集』対校研究に於いて当に必読の一本となろう。

【注2】飯尾永祥は、室町幕府の奉行で肥前守飯尾為種、桃花坊蘭雪齋^{ラン}による序文中に、

「飯尾氏の族、善永祥」と録していて、阿波国三善姓飯尾一族で「麻殖郡吳島郷麻殖塚、

飯尾^{イノハラ}（西尾村）』『倭名類聚抄』外編（地理志料卷五十五）の地より幕府評定衆に列し、将

軍家右筆職、神宮開闔、八幡奉行、関東奉行、北野社奉行、政所の執事代・南都興福寺奉行などの職に奉じた後出家し、本書を編纂した。長禄二年五月廿日他界。永祥は法名で、

『撮壤集』編纂についての記録資料は他にない。だが、文化人としても『和名類聚抄』

（十卷本系古写本）を所蔵していて、その編纂をなし得て居たことは実に興味深い。息子

為数と之種、孫に為信がいる。また、法名常蓮、永承（彦六左衛門常房）が続く。『撮壤

集』編纂は嘉吉の乱（一四四一年）から応仁の乱（一四六九年）の間の一四五四年（享徳

甲戌）に成り、そのあとも一四五八年（長禄二年五月廿日他界）まで原書に自らが補筆し

ていたと見ている。

今回、紹介する『撮壤集』室町中期写本（上中下三卷合一冊）は、川瀬一馬が所持していた際に、題箋を記載するのだが、書名「撮壤集」の下に割り書き幅の右傍らに「室町鈔本掖齋【注3】貞幹【注4】舊蔵」と所蔵者を順に記述し、その下中央に「一馬題」と墨書きしたの上に「一馬」六角の印を捺印している。川瀬一馬は、著書『古辞書の研究』（増訂版、雄松堂出版刊）第六節「撮壤集」（六七二頁から六八二頁）に取り上げていて、書名を『抱朴子』の語から用い、編者飯尾永祥について、江戸国学者伴信友【注5】が『康富記』（嘉吉三年四月三日條）を以て指摘することも述べている。川瀬は、本書の編纂主旨を「一般士庶の幼童に基礎的な知識教養を附與すべき教科書を作成するにあり、従つて、本書は通俗簡便なる百科事彙として出来上がつてをり、これに若干、國語辭書としての性質を加味するに過ぎない。」（六七五頁10行）と位置づけている。

【注3】狩谷掖齋は江戸時代後期の文献学・考証学者で、『倭名類聚抄箋注』（十冊、京本十巻本を底本とし諸本対校して注解）を著す。狩谷掖齋の事績については梅谷文夫『狩谷掖齋』（人物叢書新装版205、吉川弘文館刊）があり、末尾には主要参考文献を所載する。

他に大東急記念文庫「狩谷掖齋企画展」川瀬一馬記念講演冊子が参考になる。

【注4】藤原貞幹は江戸時代中後期の学者・好古家。日本の考古学・文献学・目録学の祖とも言われる。諱は藤原貞幹（平安前期の同名を避けて「藤貞幹」と呼称）。字は子冬。通称・叔蔵。号は無仏斎・蒙斎・瑞祥斎・好古など。「好古日録」「慶應義塾大学図書館蔵」に掖齋が貞幹に贈呈したことが記載されている。『好古小録』では下総本『和名類聚抄』について言及。

【注5】「伴信友」…『伴信友研究本居宣長の流れをくむ屈指の日本史学者』川瀬一馬・大鹿久義編「ぺりかん社、一九七九（昭和五四）年刊」

*古辞書『新撰字鏡』詳本、『色葉字類抄』、観智院本『類聚名義抄』の新見や浄藏法師の傳等で有名。

*信友の交友名簿（伴信與氏寄贈）に本書に関連する京の藤原貞幹、江戸の狩谷掖齋の名は見えない。

*川瀬一馬は、信友と掖齋の同時代研究者の立場について、五島美術館開催「伴信友企画展」（昭和四十四年八月九日）講演録に記載する。

此の『撮壤集』室町中期写本が川瀬一馬所蔵から山田忠雄先生所蔵に移行していったその経緯については不明である。山田忠雄先生は、高橋情報システム株式会社（東京都中央区新川）に依頼し、本書を写真撮影され、印画作成された紙焼き本を三宅ちぐさ（就実大学元教授）に研究目途として譲渡し、さらに此の紙焼き本を同じ古辞書研究に関わってきたご縁から萩原義雄自身が三宅ちぐさから譲り承けることになった。その経緯を伝えていくことが何よりも大切なので以下に述べておく。

筆まめな山田忠雄先生が自宅近くの郵便局（荻窪）から三宅ちぐさ宛に研究譲渡の旨として、一九九〇（平成二）年八月十七日消印の葉書きを投函されている。茲には、「撮壤集は索引を作ること重要な作業ですが引用の和名抄の本文の此先をやってみては如何でしょうか徹底して行なった者をまだ見ません」とお伝えしていて、此の葉書きから既に三十五年の月日が過ぎ去ってきていることに気づかされる。『撮壤集』室町中期写本の所蔵者であられた山田忠雄先生も泉下され、その所蔵状況も誰も知る限りでない今、再び眠りについた休蔵写本となってしまっていることが悔やまれてならない。しかし、編者飯尾永祥の名前とその人物像を記録文書などでその職歴も具さに知り得る点から、室町時代古辞書の研究視座にあつては、『撮壤集』は極めて重要な位置づけができると考える。

なお山田忠雄先生は『撮壤集』の専論を成すことはなかったが、『桂本佚名古辞書』【注6】の解題では、『撮壤集』の内容を知り得ていて、此れに関連する類本『宣賢卿字書』『北

野神社本初心要抄』『伊呂波集略本』などと共に、此の佚名古辞書所収の語彙から『撮壤集』との先後関係を見出している。

【注6】『桂本佚名古辞書』（昭和五十四年、勉誠社刊）の識語「皆文龜貳天壬戌小春七日、生年六十一歳有木民部丞」の写本で、山田忠雄先生解題で、備後吉備津宮祠官の長であることを知る。そして、同じく標記語（みだし漢字）に付訓していて、なかには無訓語も存在し、これを求めて比較するなかで『撮壤集』との接点を見出すものとなっている。音訓合符の使い分け、カナ付訓の濁音表記で云えば雨部「迎梅ガイバイ雨三四月也」天象、風雨部の上巻部については佚するが、中巻下巻に排列する薬種類と四十四薬種の語例で比較が出来、例えば「附子フシ」と「附子フシ」であって、清濁の相異が得られる。此れに対し、紙類と四十紙之類の「卦塚同界同字 軸チク」と「軸チク 塚ケ」は逆位だが近いという状況化でその表れとして捉えられている。此の詳細については別稿で改めて解析することにする。

室町時代古辞書の一本として貴重な内容を包含するのに、實在内容が停滞することがあってはいけない。とは云えど、此の紙焼き本を元に事物語彙の研究が脈々と続けられ、現在、デジタル化を進め、世に送り出す絶好の気運が廻ってきている。山田忠雄先生から紙焼き本を譲り承けた三宅ちぐさは『撮壤集』の全文データを作成し、『和名類聚抄』『下学集』との比較研究を進めた【注7】。二〇二四年に三宅ちぐさから紙焼き本と全文データを譲り承けた萩原は、紙焼き本のデジタル画像を作成し、全文データの補訂を行い、高田智和の協力を得てデジタル画像と全文データの公開を準備している。

【注7】三宅ちぐさ「『撮壤集』と『和名類聚抄』」（『就実語文』一一、一九九一年）、三宅ちぐさ「『撮壤集』と『和名類聚抄』（2）」（『就実語文』一五、一九九四年）、三宅ちぐさ「『撮壤集』と『下学集』」（『東海学園女子短期大学国文学科創設三十周年記念論文集 言語・文学・文化』、和泉書院、一九九八年）

萩原自身、此所数十年來『和名類聚抄』から『倭名類聚鈔箋注』へ【注8】を主軸テーマに掲げ、此の二重構造の複虹の色合いならぬ各々が語収載の特色（1）漢語による標記語、（2）注記①引用書名。②に注記文、③割注：①「字音」表記、乃至「反切」表記、②「和名（記載の有無）あり」、③万葉仮名での表記、④意義注記、⑤「一名」・「二云」、③万葉仮名表記と④意義注の繰り返し。の二重乃至三重の記載を見て行くことで、カナ訓みは室町時代から江戸時代へ継承書写されていくという時代の流れのなかで増大していくのだが、此の『撮壤集』が編まれるうえで、編者飯尾永祥が施すに用いた『和名類聚抄』の古写本が十卷本系にあり【注9】、その経跡を知る意味で重要な文献資料であるということを感じ得

てきた点に尽きる。

【注8】萩原義雄『和名類聚抄』から『倭名類聚鈔箋注』へー語解析データベース構築をめざしてー」〔研究集会「古辞書・漢字音研究とデータベース2022」二〇二三年三月四日講演〕を正編、萩原義雄「続『和名類聚抄』から『倭名類聚鈔箋注』へ」〔シンポジウム「字典・詞典の研究ー回顧と展望ー」二〇二四年九月十六日講演〕を続編とする。

【注9】十卷本系『和名類聚抄』の引用については、中田祝夫編「中世古辞書四種解題」『中世古辞書四種研究並びに総合索引』一九七一（昭和四六）年風間書房刊〕に詳しい。

たとえば、本書に所載する風雨部の「虹」を見るに、

○虹蜺

、^{ニシ} 蟬蜺^{タイトウ} 蟬音帝、^{トウ} 蜺音董、見和名——（蟬蜺）虹註

〔上7才1・2〕

^{ニシ} 蟬蜺^{タイトウ} 蟬音帝、^{トウ} 蜺音董見／和名——（蟬蜺）虹註

〔静嘉堂文庫蔵本（群書類従）写〕

^{ニシ} 蟬蜺^{タイトウ} 蟬音帝、^{トウ} 蜺音董見和名——（蟬蜺）虹註

〔宮内庁書陵部蔵鷹司家旧蔵本〕

*三本の写本を茲に並べて見たが、山田忠雄所蔵資料が果たす役割は大きい。

『和名類聚抄』十卷本系 天文本・第一冊三ウ（二八） 1・2

虹 毛詩注云^{タイトウ} 蟬蜺 帝董ノ二音／和名余之 兼名苑云蜺 五稽ノ音／反又／

五結五繫^{ケイ}ノ反今案^{ニハ}雄^ヲ曰^レ虹ト雌^ヲ曰^レ蜺也 〔天文本・第一冊三ウ（二八） 1・2〕

としていて、天文本の「蟬蜺」に『撮壤集』右訓表記「タイトウ」のカナ字音表記が見えて
いることからして、そのカナ訓付けの元資料として見ていくことが可能なものとなってい
る。とはいえ、

○雨

、コサメ 藤深 和名——〔上6才5〕

コサメ 藤深 和名／——〔静嘉堂文庫蔵本（群書類従）写六才7〕

コサメ 藤深 和名——〔宮内庁書陵部蔵鷹司家旧蔵本「1・5」〕

『和名類聚抄』十卷本系 天文本・第一冊三ウ（二八）4

藤深シヤクホク 無名苑云一名「細雨」小雨也——ハク 麦木二音和名古散女

左傍字音「シヤクホク」の付訓については、『和名類聚抄』諸本にあつても天文本（東大本）のみに過ぎず、字音表記も三卷本『色葉字類抄』と同音「バクボク」を以て記載する。さらに、『撮壤集』諸写本にあつても一切見えない。編者飯尾永祥が引用した『和名類聚抄』もこうした付訓未記載の写本であつたこととみるが妥当だろう。とは言え、両語には拠り所とした「和名」の語が所載されている。飯尾永祥が必要としたのが漢語名での表記と此れに付随する注記文について、本邦古辞書である『和名類聚抄』を基軸にした和語とその典拠資料を用意することにはかならないと云うことになる。それについては、若干の注記文だけを必要としていたことが伺える。

『撮壤集』の「和名類聚」「和名——」「和名——」「和名」の語数は、「和名類聚」七、「和名——」四八四、「和名——」一、「和名」八二である。「和名類聚」七例は次の通り。

(1) ヤウウ 陽鳥 和名類聚 〔天象部日・上4才8〕

(2) ケン 弦月 ユミハリツキ 和名類聚／上—下像通 月— 〔天象部月・上4ウ4〕

(3) マン 鬢 和名類聚 〔衆色類（附数并假荘）假荘類・上3才3〕

(4) ハ子ツチ 埴 和名類聚 〔地儀部土地・中34才4〕

(5) ウツム 埋 此二字注勝示也和名／類聚出文書類中 〔地儀部田畠・中34ウ6〕

(6) カチメ 嶋布 未滑海藻詳和名類聚海藻注／嶋字鳶同勻會 〔地儀部海藻類・中36ウ8〕

(7) 沓^{クツ} 和名類聚履註云用鞆字音沓鞆／革履也沓也食也勻會 「衣服部衣類・下81才3」

(1)(3)(4)は、典拠名「和名類聚」だけで、注文は未記載とする。なので、(2)(5)(6)(7)の四語だけが『和名類聚抄』注記に従うことになる。これに依って「和名―」「和名―」「和名―」「和名」の注記語例も必定な数値となる。そのうえで、総数五七四例ということになる。

また、逆に注記がありつつも「和名」の典拠名を冠尾しない標記語が幾つか存在することについても着目せねばなるまい。逆に、所載標記語が無訓であったり、全く注記をしない語が存在する点にも目を配ることを忘れてはなるまい。

其の意味で、『撮壤集』のデータベース開発に努めた三宅ちぐさ（就実女子大学元教授）の研究成果による本書『撮壤集』データと紙焼き影印資料（筆写所蔵）を併わせての今回の学界公開（国研）注9は、実に日本語学研究者のみならず、歴史記録や人物像、事物を知る諸氏研究者にとっても近代語（＝室町時代語）を知り、利用していくためにも不可欠なものになってきている。

二、『撮壤集』の部類項目

『撮壤集』の部類項目（上中下巻の目録による）は次の通りである。

上巻

- (1) 天象部 (①天②日③月④星⑤北斗⑥七星⑧九曜⑨二十八宿)。
- (2) 風雨部 (⑩風⑪雨⑫雪⑬雲⑭雷⑮電⑯虹蜺)。
- (3) 佛部 (⑰佛名⑱菩薩⑲五代尊⑳十六羅漢㉑十二天㉒十六善神)。
- (4) 神部 (㉓天神七代㉔地神五代㉕上七社㉖中七社㉗下七社㉘諸社㉙祭祀具附道祖神類)。
- (5) 祈禱部 (㉚許法㉛山門四ケ大法㉜東寺大法㉝三井大法㉞外典陰陽)。
- (6) 寺院部 (㉟五山京師關東㊱十刹京師諸國及甲利㊲尼寺㊳禪家許堂㊴律家㊵四ケ大寺㊶七大寺㊷許寺㊸七佛薬師㊹三十三所観音洛中洛外㊺三十三所巡礼)。
- (7) 諸宗部 (㊻禪宗㊼行事禪家㊽佛事禪家㊾茶毘禪家㊿器用附導具51諸宗法事)。
- (8) 四日十之部 (52時節附支干53十一月異名54花鳥)。
- (9) 年中行事部。(55正月56二月57三月58四月59五月60六月61七月62八月63九月64十月65十一月66十二月)

(10) 衆色類部 (67 衆色名 68 筭數類 69 假莊類)。

中卷

(1) 地儀部 (①土地②田畠③山類④水邊⑤海部⑥舩部⑦海藻)。

(2) 漁獵魚部 (⑧魚名⑨貝類)

(2) 漁獵鳥部 (⑩鳥名⑪鷹部⑫鳥體)

(2) 漁獵獸部 (⑬獸名⑭牛類)

(2) 漁獵蟲部 (⑮蟲名⑯異名)

(3) 草木部 (⑰草類⑱花部⑲木類⑳竹部)

(4) 五穀部 (㉑稻穀類附雜穀 ㉒農作附農器)

(5) 乗物部附馬鞍 (6) 車部 (7) 輿部 (㉓馬類附牧) (8) 鞍部

(9) 燈燭部 (㉔灯火類附炭)

(10) 金玉部 (㉕金銀⑳珠玉) (11) 京洛附行旅 (12) 宮闕部 (13) 京城部 (14) 洛中條里

(15) 行旅部 (16) 術藝部附諸藝具

(17) 諸道部 (㉗番匠具足⑳鍛冶具足㉘鑄師具足)

(18) 紙部 (19) 家屋部 (㉙屋具類)

(20) 材木部 ㉚家具部 (㉚飾具)

下卷

(1) 人倫部 (①人部②支體③臟腑④病疾)。

(2) 醫書部 (⑤醫經⑥醫方⑦藥種⑧合藥)。

(3) 官位部 (⑨官名附唐名 ⑩位階附唐名 ⑪聖道官)。

(4) 武職 (⑫武職名 ⑬武具⑭太刀⑮刀具⑯釵類⑰弓部⑱矢部⑲武略)。

(5) 樂目錄附樂器 (⑳壹越調㉑沙陀調㉒平調㉓性調㉔大食調㉕乞食調㉖雙調㉗黃鐘調㉘水調

㉙盤涉調㉚高麗㉛伯平調曲㉜狗雙調曲㉝廿八調㉞催馬樂㉟神樂㊱樂器)。

(6) 衣服部 (㉟衣服類附冠帽織物)。

(7) 經論部 (㊱經㊲諸大乘律㊳五部大乘經㊴許大乘論㊵諸小乘論㊶三藏教㊷四教㊸五時

④⑥ 禅録(④頌)

(8) 本書部 (④⑧ 書籍名 ④⑨ 道書 ⑤⑩ 詩集 ⑤⑪ 聯句)

(9) 歌道部 (⑤② 集名^{附歌体} ⑤③ 連歌)。

(10) 遊楽部 (⑤④ 遊楽^{附遊楽具})。

(11) 飲食部 (⑤⑤ 食物 ⑤⑥ 羹類 ⑤⑦ 點心 ⑤⑧ 菜類 ⑤⑨ 異説 ⑥① 茶子 ⑥② 酒類 ⑥③ 茶類)。

(12) 香部 (⑥③ 香名 ⑥④ 合香) (13) 繪部 (14) 畫師名 (15) 八景名

目録部立から見ても判るように、室町時代の文化を表象とする言語語彙がその半数以上の部立部類として組み込まれていて、画期的なことばの簡素化と濃密化の要素を備えた辞書になっていることが見てとれる。

その一端として例えば、室町時代成立の古辞書『下學集』や『節用集』には設定を見なかつた上巻(7)諸宗部 (④⑥ 禅宗 ④⑦ 行事^{禪家} ④⑧ 佛事^{禪家} ④⑨ 茶毘^{禪家} ⑤⑩ 器用^{附導具} ⑤⑪ 諸宗法事) などの収載語のなかには、これまた特殊性を帯びた語例が数多く収められていて、此れに傍訓を添えて特殊な訓みを具さに知る手がかりともなっている。例えば、現代の『日本国語大辞典』所載の語用例のなかに如実に表象する語例を以て示すと、

○「鎖龕」〔二九才二〕：『日国』〔名〕仏語。遺骸を納めて棺の蓋を閉じること。さ

がん。*太平記〔一四〇後〕三三・將軍御逝去事「中一日有て、衣笠山の麓、等持院に

葬し奉る。鎖龕は天龍寺の龍山和尚、起龕は南禅寺の平田和尚」*撮壤集〔一四五四

(享徳三)〕「鎖龕 ソカン」*運歩色葉集〔二五四八(天文一七)〕「鎖龕 ソガン」

○「起龕」〔二九才二〕：『日国』〔名〕〔龕〕は棺の意) 仏語。茶毘に付すために棺

を送り出すこと。禅宗で用いる。*空華日用工夫略集永徳二年〔一三八二(弘和二)永

徳二)〕六月一五日「起龕蘭州」*太平記〔二四〇後〕三三・將軍逝去事「起龕は南禅

寺の平田和尚」*尺素往来〔一四三九(永享一一)〕六四「葬礼茶毘之儀式者。〔略〕

鎖龕。起龕。點茶」*談義本・教訓続下手談義〔一七五三(宝暦三)〕四・三囲通夜物

語「焼香の和尚、諷経の東学〔略〕起龕・鎖龕〔略〕など役々をつくし」*金閣寺〔二

九五六(昭和三一)〕〔三島由紀夫〕二「起龕の読経がはじまり」

この意味からも、じっくり、上巻(3)佛部(4)神部(5)祈禱部(6)寺院部(7)諸宗部と、下巻(2)醫書部

(5)樂目録^{附録器}(7)經論部(8)本書部(12)香部に収められている語群にも向きあつていくことにもなる。

此の『撮壤集』に一早く気付いたのが江戸時代の契沖【注10】、その門下の海北若沖編『倭訓類林』七巻【注11】となる。その影響を承けた谷川士清『倭訓栞』編纂【注12】に拡張していく。増補語林『倭訓栞』【注13】末尾には本書の活字化本文が士清の近きにあった木村正路の手に依つて転載されていて、士清が常に傍らに本書を置いて編む和語集のきっかけづくりとなっていたこと示唆するものと見ていた後人研究者の示唆と見る。

さらに、『撮壤集』が多くの学者の目にとまるものとなったのが、中田祝夫・根上剛士著『中世古辞書四種研究並びに総合索引』影印編〔風間書房刊〕による四種辞書（撮壤集・頓要集・温故知新書・運歩色葉集）で、本書の索引カード作業には野沢勝夫が関わり、その覚書きを元に中田祝夫による解題【注14】がなされている。影印資料は、宮内庁書陵部蔵（鷹司宮本旧蔵）の写本〔図書番号 34523-3-350 5〕が用いられている。

【注10】契沖は、『万葉代匠記』（契沖全集第一巻、岩波書店刊）に、源順『和名類聚抄』を「和名集」と呼称して斯く記述している。

此度和名集ヲ初メテ日本紀ヨリ菅家萬葉集マテノ假名ヲ考ヘ見ルニ、皆一同ニシテ此集ト叶ヘリ。又行成卿ナトノ此マテノ假名ヲ見ルニ、此集ニ違ハネハソノ後漸々ニ誤レル歟〔(四〇ウ) 一八五頁〕

此には、仮名遣いの基底が「万葉仮名」表記を規範として受け継がれていて、江戸時代の国学者からは必ずしも「契沖仮名遣い」は受け容れられたものとは云えないのだが、賀茂真淵に支持され、明治期の「歴史的仮名遣い」へと受け継がれていることは確かである。仮名遣いの観点からも、『撮壤集』に於ける仮名遣いの様相についても見据えておくことが肝要かと思われる。

【注11】『倭訓類林』（日本古典全集上下二冊）には『和名抄』からの引用は必ずしも多くはないが、例えば①「靛霖(コサメ)」「和名鈔己左女靛霖小雨也」〔下三八六頁2〕。②「安曇(アツミ)」「同紀安圖美姐也又和名安都之信濃国名安或作間」〔安部四〇四頁2〕。③「明星(アカホシ)」「和名抄安保之」。④「霽(アマタリ)」「同(和名抄)安万之太利―ハ屋ノ簷ノ前雨流下也云々」〔安部四二三頁2〕などを見ることになる。

【注12】『倭訓栞』（自筆写本（津市博物館蔵）影印、三澤薫生解題、勉誠社刊）があり、それ以前に名著刊行会から発刊された活字本上中下と後編（版本影印）一冊、計四冊が研究対象とされきていた。近年、三澤薫生、小野春菜による原自筆本、組入本、清逸本、整版本を取り巻く諸写本系統の流れを視座とした詳細な報告が発表されてきている。

【注13】増補語林『倭訓栞』内題…伴信友補閲和訓栞。上中下 洞津 谷川士清纂〔名著

刊行会刊」で、下冊に附録『撮壤集』(二〇四十四頁)活字化がなされた資料となっているが、今回紹介する『撮壤集』室町写本からの引用ではないため、内容に異動が生じる。

【注14】中田祝夫・根上剛士著『中世古辞書四種研究並びに総合索引』影印編(風間書房刊)の解題が詳細に書名、著者、本文内容について最初に解題記述したものとなっている。

デジタル画像と全文データとの併用が此れからの研究者に広く用いられていくことにより、萩原自身が知ろうとした『和名類聚抄』の継承受容の実態把握の研究も進展していくと考えてきている。此れを江戸時代にあつて、所蔵且つ活用していたであろう藤原貞幹、そして、何等かの今で言うことば情報の交流を持ち合わせていた江戸時代の知識人、博学者などの人たちとその一人として狩谷掖齋自身が辿り着いた。江戸時代最後の旧蔵者の一人であった掖齋自身は、標記語「虹蜺」に於いて、「撮壤集引合」とさり気なく自著『倭名類聚鈔箋注』の語注記に記載していたりする。

最後に、本研究、本作成データの礎をくださった山田忠雄先生、それを承けて研究に邁進され続けてきた三宅ちぐささんが快くデータ・資料を萩原にご提供いただいたことにより、デジタル画像と全文データを公開する機会が訪れたことは、古辞書研究の一員として喜ばしい限りである。

(以上、萩原義雄)

三、『撮壤集』全文データベース

『撮壤集』全文データベースの底本は、室町中期写本の紙焼き本のデジタル画像である。項目は、三宅ちぐさ先生の初期設計にしたがい、①連番、②語形、③掲出語、④注記等、⑤部類名(目録)、⑥部類名(本文)、⑦巻、⑧丁、⑨行、⑩大漢和の一〇項目である。①～⑨は萩原が校正を行い、特に⑩大漢和は萩原により掲出語の漢字について『大漢和辞典』の文字番号を記載したものである。近日中、国立国語研究所ウェブサイト(日本語学史研究用テキストデータ集、https://www2.ninjal.ac.jp/textdb_dataset/)において、の紙焼き本のデジタル画像(PDF)とともに、『撮壤集』全文データベース(エクセル形式とTSV形式)を公開する予定である。

(以上、高田智和)